座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ ： ティリチ・ミール

進行役 ： 飯嶋秀治 九州大学人間環境学研究院准教授（比較宗教学、文化人類学）
少人数セミナー「中村哲の仕事を読む」を担当

参加者 ： 村上　優 ペシャワール会会長・PMS 総院長・医師（精神科医療）
中原興平 西日本新聞社 記者
邊見紗来 福岡高校 2 年 ペシャワール班
木原秀将 九州大学医学部 1 年・哲縁会
鉾立春響 九州大学医学部 6 年・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会
樋口　響 福岡高校 1 年 ペシャワール班 （当日は欠席のため、インタビューシートのみ）

座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

記録 ： 九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

飯嶋　：九州大学で教員をしております飯嶋といいます。特にさっきの紹介のところで「哲縁会（てつえんかい）」の人とか高校生の人とか、まあ一山で紹介だったので、どういう方なんだかよく分かってないっていう状況があるので、最初は自己紹介と、あとは、どういう経緯でここに来たのかっていうことと、あとはどれほど期待して、これからお話するのかっていうこの三つぐらいを、最初だから1人最大4分ぐらい持っていって、2週目ぐらいにお互いが言ったことをちょっと話ができたらいいだろうみたいな。もちろん会長さんを目の前にして、4分でとはとっても言えないですけど、そういう形でさせていただいてよろしいですか。じゃあ、村上さんどうぞ。

《自己紹介、中村哲先生との関わり、この座談に期待すること》

村上　：村上と申します。中村先生とは、学年が（卒業が）一年下の医学部の卒業でして、彼は最初は、精神科の医師でスタートしたんですが、佐賀にある国立肥前療養所という所で出会ったのがほぼ初めてです。その後、意気投合してお付き合いするようになったのが1974年ですから、もう40年…です。一緒に山にしょっちゅう行くぐらい…もありませんね、その翌年に月イチのトレーニングをしたり、（ペシャワール）会を発足するときにも参加もしましたし、初代の事務局長をやっていたのが中村先生の同級生で、今日来ていた宮﨑先生のもう一人のご友人です。

彼（佐藤雄二先生）は43歳の時に、がんで亡くなったんですね。そのあと、1992年から事務局長をして、その関係もあっていろいろとこれまで関係を続けてまいりました。そうですね、あと何を言えばいいですかね？

飯嶋　：あとは、村上さん、今日聞きたいことって、何かあったのかなと思って。

村上　：すごく熱心にインタビューシート書いたりとか、熱い思いがいっぱいあるんで、まずはそれをお伺いさせていただいたり、それについてお答えできればと思ってます。彼は、非常に多面な人ですね。いろいろな側面のある方ですね。

僕らみたいに絶えず一緒にいるとですね、皆さんが彼のことを知る映像であるとか、本の中にある高貴な話は、あんまり聞いたことがなくって、ははは（笑）。非常に行動の人ですから。行動が彼の全てでして、彼の行動を追いかけていってサポートするのが僕らの役割だったので、どんなところに彼の、興味を持たれてるのかなとか、関心を持っていただいて共感をしていただいてるのかなというのをお聞きできれば、と思っています。

飯嶋　：なるほど、逆に身近にいただけにですね。分かりました。よろしくお願いいたします。
じゃあ、時計回りでいきましょうか。

中原　：西日本新聞の中原といいます。よろしくお願いします。

私は新聞記者なので、中村先生とペシャワール会、会長も含めて、取材をずっとしてきていて、2014年の末に現地でも取材をさせてもらいましたし、国内でも何度も、何度も話を聞いてきています。自己

紹介をするんでしたね。

飯嶋　：自己紹介と、あと出会った経緯みたいなのと、今日の（座談会）で何かを期待してるかっていう。

中原　：もともと確か、事件とか災害とかの取材が長いんですけども、人権とかを担当することがつながって、そうした中で、もともとうちの新聞社は地元紙でもあるので、国際を担当する記者の中で、ペシャワール会を担当する記者が歴代いてですね。私の前ずっと先輩が担当していて、私の担当になったときに、ちょうど安全保障法制が成立するかしないかという議論の中で、そのときは戦後 70 年の年だったんです。これはたまたまですけど。

その中で『戦後 70 年へ　安全保障を考える』(*注 1) という大きな、年間を通してやる企画の中で、中村先生の活動を通して私たちの国際貢献とか平和の在り方っていうのを考えたいと。もちろんそれまでにも私の先輩記者とかも何度も当然というより、うち（西日本新聞社）はもう、先生が行くときからずっともう取材を誰か先輩がしているので、1983 年に会が発足して、84 年に行かれるときも、行く前のインタビュー記事もありますし。なんですが、アフガニスタンの現地には行ったことがなかったので、これは自分たちの目で現地で聞きたいということで私が行ったと。その後もずっと取材をさせてもらってきているところです。

書いてきたことというのは、いろんな角度で書いてきたつもりなんですけども、もちろん全く書き切れてないし、恐らく生涯かかっても多分書き切ることは無理、無理というと変ですけど、現地に行ったときも先生に、とても全てを書くことは到底不可能っていう、「私が先生の活動の全てを理解することはできないです」と。「すぐには到底無理なので、好きに書いていいでしょうか」っていったら、「それが一番いいですね」と言っていただくなど、訳の分からん仁義を切ったりするような、普通そんなことしないんですけど。

皆さんに一番聞きたいなというか、議論ができたらいいんじゃないかなと思うのは、どうやって伝えていくかということが私の仕事でもありますし、今日来てる、谷津さん（日本電波ニュース社）とか、朝日（新聞社）の佐々木さんとかと話すのはそういうところで。特に、今からは先生のことを直接知らない方が、当然、当たり前ですけど増えていくに決まってるんですよね。

知るチャンスがあれば、必ずその活動と実践に感銘を受ける人ってのはずっといるでしょうし、研究をしたいという人も絶対出てくると思うんですよね。ただ、大学生の皆さんとか高校生の皆さんとかがこう、何というんでしょうか、普通の若者というと変な言い方なんですけどね、「勉強しよう！」と思

＊注 1：西日本新聞は年間企画「戦後 70 年　安全保障を考える」を 2014 年 10 月～2015 年 9 月の長期間にわたり連載。
一連の連載は、2015 年 12 月、第 21 回平和・協同ジャーナリスト基金賞の奨励賞を受賞。
『安保法制の正体 ： 「この道」で日本は平和になるのか』西日本新聞安保取材班編(2016.2、明石書店)
https://www.akashi.co.jp/book/b217775.html
この連載の中にアフガニスタン現地で中村哲医師を取材した「中村哲がつくる平和」も含まれる。
「中村哲がつくる平和」は、西日本新聞社の中村哲医師特別サイト「一隅を照らす」から公開されている
https://www.nishinippon.co.jp/theme/peacemaker_tetsunakamura/

って何かする以外にも何か、知るチャンスが、恐らく皆さんそういう活動されてると思うんですけど、カジュアルな感じで触れたりできる、あるいはどういう部分を知りたいと若い人たちは思うのだろうかと。先生がおっしゃったように、会長がおっしゃってたように、ものすごいいろんな、活動自体もいろんな切り方ができますし、中村先生の、おちゃめな方でもあったしというような、どういう部分を特に伝えることができると継承ができるのかなっていうのを一番、ずっと考えてるところなので、何かそういう話ができたらいいなと思っています。長くなりましたすみません。

飯嶋　：よろしくお願いします。

中原　：よろしくお願いします。

飯嶋　：じゃあ、代表みたいになっちゃってますけど。先ほど一山的に紹介された、邊見さん、でいいのかな？

邊見　：よろしくお願いします。福岡高校の「ペシャワール班」っていうのを立ち上げました邊見紗来といいます。高校 2 年生です。私が中村先生のことを知ったのは先生が亡くなられたときで、その後、ちょうどその年の 4 月に福岡高校に入学しました。

それで先生の、医者という立場でありながら他のさまざまな活動をされていたということとか、現地の人に寄り添った作業をするという、その考え方に、私は将来何らかの形でそういった活動に関わりたいと思っていたので、すごく参考になって、尊敬するようになりました。

他にもたくさん支援されている団体はあると思うんですけど、詳しく説明できるか分からないですけど、中村先生の信念や考え方にすごく心を引かれて尊敬するようになって。

最初は「尊敬するなー」ぐらいの感じだったんですけど、（福岡）高校で、文化祭とかで展示のイベントとかがあったときに、なかなか興味を持ってくれる人が少ないのと、ただ展示してるだけ、募金してるだけ、という状況があって。それでは先生の本当の信念とか活動というのが、伝わっていかないなと感じて、もうちょっと幅広く活動したり、根本的なところを伝えていくことができないかなと、昨年の 10 月ぐらいに（ペシャワール班を）立ち上げました。

今いるメンバーが 5 人なんですけど、私が理想というか、やりたいなと思っていたことは、みんなで一緒に学んでいったり、そこから伝えていくことで、その前にやっぱり学ばなきゃいけないというのがあって。学んでいきたいな、と思っているんですけど、なかなか思ったような活動ができなくて、それがすごく今、悩んでるところです。伝えていくという面では何か作るじゃないけど、講演会するとかなったら、自分たちで作る、それを伝えるって、そのほうが逆に簡単なのかなと思って。学ぶとなったら、本を読んだり、映像を見たりというのはすごく労力がいることで。そこから学ぶというのは結構大変なことだなと思っているので、そこを今後もうちょっと、頑張りたい、というか、そこをやって、それから伝えていきたいなと思っています。

私は、伝え方ということにすごく、これからどうしていったらいいのかなと思っていて、学校でそういうイベントみたいなことをやっても表面的なことだけしか伝えることはできないし、映像を流すと

いっても、やっぱり強制的に全員に見せるというようなことは不可能だし、希望者だけといったら、あんまりみんな興味持ってくれない、というのがあって、伝えていくときに、どうやったら、楽しいじゃないけど、根本的なところから伝えていくことができて、しかも興味を持ってくれるようなことができるのかというのをすごく考えていて、今度 5 月に福高で文化祭があるんで、そこでまた何かやるんですけど、その企画を今、すごく悩んでいるっていう状況です。きょうは何か学ぶことができたらなと思っています。よろしくお願いします。

飯嶋　：この自己紹介、その他の部分が結構いっぱいあるんだね。今夜はなんかやるんでしたっけ。

邊見　：今夜は、私たち（ペシャワール班）の活動として、用水路の灌漑事業のことについて、今まで少し調べたり、（中村先生の）信念を考えたりっていうのはしてきたので、少しでも伝えることができたらなと思って、オンラインの講演会をします。もしお時間があれば、何かアドバイスだったり、今後の活動の支えになったらいいなと思うので、よかったらご参加いただけるとありがたいです。

飯嶋　：大丈夫、そしたら。

木原　：九州大学医学部 1 年の木原秀将といいます。
インタビューシートは時間の都合であまり書けていないのですが、自己紹介からします。
　出会い、中村先生とのつながった経緯というのは、亡くなったときが、やっぱり全部、こういう方がいるんだって初めて知ったきっかけで。そのニュースだけやったら自分ももしかしたら、それで「そういう人がいたんだな」で終わってたと思うんですけど、高校の先生が中村先生の知り合いのような方だったらしくて、それで、その先生が授業をしてくださって、自分が医師になろうかなっていうぐらいの、医師っていう仕事もいいなっていうぐらいのときに中村先生の存在を教えてくださって。そこでそういう医師の在り方もいいなっていうふうに思って、中村先生に興味を持って、医師にもなろうっていった感じで、それで医学部を目指しました。
　初めの頃は地元の医学部を目指してたんですけど、そこ落ちまして、浪人中に中村哲先生を、『想いを繋ぐ会』(*注 2) っていうのを九大のオンラインでやられていて、村上会長とかが話されていたのを聞いて。九州大学に来ればこういった活動にもっと参加できて、自分のそういった医師の価値観というか、そういうのも深められるし、貴重な体験ができるんじゃないかと思って九州大学に行こうっていうふうに決めて。何とか浪人 1 年目で九州に来れたので、それで今は、記念講座を受講したり、あと

＊注 2：2020 年 9 月 12 日、九州大学アジアウィーク 2020 にてオンラインイベント「共に歩み ここに生き 未来を照らす～中村哲先生の想いを繋ぐ会」が開催された。村上優ペシャワール会会長、藤田千代子 PMS 支援室長、谷津賢二カメラマン（日本電波ニュース社）が講演し、九州大学の学生たちとのジョイントフォーラムも行われた。準備広報運営に関わった学生たちは「中村哲先生の想いを繋ぐ会」として、つながりを持ちながら活動を続け、2021 年度の中村哲記念講座にも準備から関わった。その後、中村哲先生の志を継承することを目的とした学生団体「哲縁会（てつえんかい）」の活動が始まり、広報用 Twitter アカウント（@tetsu_memorial）を引き継いだ。

は、中山先生の講演会に運営として参加したり、いろいろ関わらさせてもらって今は哲縁会のほうに、メンバーの１人として活動しています。　今後どうかっていうのは、自分は医師になるんですけど、その中村先生のような医師にもなりたいっていう気持ちはあるんですけど、同じ道を行く方法もあると思いますけど、それ以外の道で中村先生の思いをつなぐ方法もあると思うので、自分の中でどういった道がいいかっていうのをまだ決めかねている状態なんです。こういった機会を得られているので、今後の自分の在り方について考える場所にしたいなっていうふうに思っています。今日はよろしくお願いします。

飯嶋　：僕は飯嶋秀治と申しまして、すみません、唯一この中でインタビューシート書いてなかったんですけど、九州大学の中で人間環境学研究院というところで文化人類学の教員をしてます。文化人類学っていうのは、現地人の視線を把握するために現地で 2 年間一緒に暮らすっていう方法の学問なので、中村哲さんのファンってものすごく多いんです。

僕自身はオーストラリア先住民の専門家なんですけど、アボリジニっていわれてる人たちですね。だけど僕の先輩に当たる先生っていうのは清水展さんていう人で、前回こちらのほうで記念講演なんかやったと思うんですけど、その清水展さんと一緒に『自前の思想』って本を編んだんですよ。(＊注 3) そのとき僕の担当が石牟礼道子で、もう一人の清水さんが書いたのが中村哲さんだったんです。

自分の専門の石牟礼さんは、10 年ぐらい水俣に通ってたので書けたんですけど、もう一人ぐらい共編者の清水さんがやってること、清水さんってずっと中村哲を推して、授業でもずっと話してたので、それでちゃんと読んでみようと思って、それで 2 年前に、少人数セミナーで『中村哲の仕事を読む』っていうのを 2 年前から始めて、1 年間に 5 冊ずつ読んできてますね。

そのときのやり方っていうのは、もうとってもシンプルなやり方で、5 冊選んだらそれを必ず「時系列で読む」っていうことで、理由はやっぱり最後の中村哲さんのほうからイメージを持ってる人があまりにも多いので、そうじゃなくて中村哲さんも最初のときから成長するんだっていうのを分かるために、一番最初から時系列で読まなくちゃいけないっていうことですね。

それからもう一つ、注意したのは「当時の文脈で読んでくれ」っていうことで、やっぱり今の状況と中村さんの本っていうのを直で読んじゃう人がとっても学生だと多いので、そうじゃなくて、このときの発言っていうのは、どういう状況の中でどういう政権が何を言ってた中で言ってたのかっていうことを読めるようにしようっていうことですね。あとは分かんないことがあったらちゃんと調べて、「実感として分かる想像力を持って読みましょう」っていうことで。例えば何ヘクタール開きましたっていっても、多分その状態だと情報だけで頭が素通りしちゃうので、人体の実感でいったらどのくらいの大きさかっていったら、例えば福岡市でいったらどのくらいの大きさだか実感できる？っていうのをやって、それをやらないと本は見たことになっても読めたってことにはならないので、それずっと 2 年

＊注 3：『自前の思想 ： 時代と社会に応答するフィールドワーク』清水展,飯嶋秀治編（2020.10,京都大学学術出版会）
1 章「字義通りのフィールド＝ワーカー ： 中村 哲」清水展
https://www.kyoto-up.or.jp/9784814003006.html（出版者）
https://hdl.handle.net/2324/1001707385（九大所蔵）

間やってきてます。これからあと1年間かけて、あと5冊読んだらもう一応、中村先生が書いた本と編集したのは全部終わりっていう形になるので、これで一段落を付けた後、どういうふうにしようかなっていう風に考えてるとこです。

きょうとっても良かったのは、実はその本を読んでる中でとっても不思議だったのが中村さんって、やっぱり研究者の間で、詳細には書かないんだけど、言葉の端々で滝沢克己さんの、これ影響受けてんなっていうのが分かったんですよ。そしたらそれが今日の（宮﨑先生の）話で出てきたんで、今回とっても期待してます。よろしくお願いいたします。

じゃあ最後。

鉾立　：はい。九州大学医学部6年の鉾立春響と申します。

私は将来、中村哲先生のように、恵まれない環境の子どもたちの地域で医療だけではなく、経済だとか教育の支援のできるような医師になりたいなと思って、実際にこの九州大学に入学をして。出会いとしては、中村先生の活動自体は何となくテレビ等では知っていたんですけれども、九州大学に入学して初めて九州大学の医学部出身だっていうことを改めて知りまして、すごくそこに何かの縁を感じていたところではあります。

実際に生前の中村哲先生に直接お会いする機会だとか、あとは自分のこれまでの活動等を先生の前で発表させていただくような機会に恵まれまして、そのときにもすごく叱咤激励をいただいて、応援のメッセージもいただいたっていうのが、結果として、もう2年、3年前に亡くなられたときには、それが最後直接受け取った言葉に自分としてはなりましたので、すごくそこは大切に感じていました。

一昨年ですね、村上先生にもご登壇いただきましたけれども、九州大学として『中村哲先生の想いを繋ぐ会』っていうことで、運営の中でも先頭に立って会を運営して、その関連で昨年（2021年）、今年度ですけれども、中村哲先生の記念講座のTAと実際にそれを大学の中だけではなくて外にも発信していこうってことで哲縁会の立ち上げにも関わらせていただきました。

私自身は春から、国家試験合格していればなんですけれども、医師として現場に立っていくので、またそこで感じ方もさまざま変わってくるとは思うんですけれども。やはり中村哲先生から一番受けた印象としましては、医師っていうもの自体がただ病気だけを診ればいい職業ではなくて、やはり患者さんだったり、患者さん以外の社会背景だとかそういう生活の背景まで見た結果、中村哲先生はそういう行動に移されたのではないかなというふうにすごく感銘を受けております。

特に、私自身も将来そういう、なるべく発展していく方針、方向ではなくて、その中で顧みられないような環境に住んでいる子どもたちのところに関わりたいなと思った経緯もあるんですけれども、中村先生も実際に講演会の中で、この昨今の目まぐるしい科学技術の発展等に対して少し苦言を呈されていたところが当時の自分としてはすごく印象に残っております。

今日の座談会なんですけれども、宮﨑先生の（インタビューシートの）コメントの中で、「彼自身も嫌っていたヒロイズムとして取り扱われず」っていうお話が、すごく自分の中でもこれまで伝えてくる立場として活動してきた中で少し気になっていた部分がありまして、やはり亡くなられた方の言葉を自分たちが切り取って伝えていくっていう中で、どこか神格化されてくといいますか、良い部分といいますか、中村哲先生の全体ではなくて部分が色濃く残っていくっていうことが、本当に伝え方として正

しいのかっていうことに関しては非常に悩ましいなというふうに感じていますので、実際に活動を現地でサポートされてきた皆さんのご意見として伝え方の点で、どういうところが望ましいのかっていうのはお話伺えればなと思っております。

飯嶋　：ありがとうございました。これでやっと一人一人が何となく、どういう背景でなんに関心があったのかっていうのが一巡できた感じになったと思うんですけど、そうしたら 2 巡目こうしましょうかね。他の人たちが言ったことで関心があったこととか、なるほどと思ったこととかっていうのをちょっと共有して、また 1 周してみましょうか。あと、その後はもうフリーディスカッションにしようと思いますので、じゃあ、こんな感じにしますか。

《若い世代の共感、関心は？中村哲医師のどんなところに引かれるのか》

村上　：僕から先に言うとあれだから、まず…（若い方たちに）。

飯嶋　：そうですか、じゃあ、二巡目はこっちから行こうかな。

村上　：まず、自由でなんかお話しされたらどうですか。

飯嶋　：なるほど。

村上　：僕はすごく興味あるのは、本当に若い方がお見えになってるのがすごくうれしくて、話を聞きたいな、と。

飯嶋　：どこにっていう話でしたからね、さっきの。

村上　：伝えようっていうことを一生懸命考えていただいていて。
　それは、うっすらうれしいんだけれども、そのためには分からないといけない、と。だけど多分、なんかに共感したんですよね、中村哲にね。共感したその、そこが一番、広がるときに大事なポイントなんだな、ですよね。だから、どこが一番共感したのか。

飯嶋　：そうですね。引かれたのか。

邊見　：やっぱり、他の本とか読んでたときに、他の支援団体のこと挙げられていて、それはただ、お金的な面だったり、ただ、自分たちが現地に何かしてあげてるっていって、ちょっと利益を得るためにそこに行ってる。前に中山さんの講演会のときに、「志の高い人は採用しない」っていうふうに言われていて、あまりにも見返りがないから、そんなに志を持った人に行かれたらすぐに諦めてしまうから、そんなに志の高い人は採用しないっていうふうに言ってたっていうのを聞いて、ああってなって、本当に

現地の人だけのために、自分の利益のこととか全く考えずに目の前の人のために何ができるかっていうのだけを考えて活動されてたっていうのがすごく引かれました。

村上　：すごい逆説的、だよな。ねえ。

飯嶋　：どうですか。

木原　：そうですね。自分が共感した点っていうと、いっぱい報道されてるような灌漑事業とか、そういったところで他の支援団体とは違ったやり方でやってるとこも、素直にすごいなっていう感じだったんですけど、その後で学校を建てて、自分がいなくなっても、地元だけで灌漑事業が続けられるようにしたじゃないですか。

　そういうところで、ちゃんとそこを考えてるってところで、びびっと来て、あとはマドラサの話だったりとか、よくある支援だけをぼんって投資だけしてさよならじゃなくて、考え方っていうか、知恵を残してそこでちゃんと育まれるあれをしているのがすごく自分は引かれたところになります。はい、こんな感じです。

鉾立　：そうですね。2 人が言ってくれたところは自分もすごく共感するところだなと思いまして。ただ、自分はそういう現地とかの原体験みたいなものがどうしてもないので、頭の中だけで、そういうふうに考えて目指しているっていうのが現状としてあるんですけど、それこそ中村先生は虫取りが好きだったり、自然のところで実際にアフガンとかに行かれた際にも、自分の好きな所もそういう土地に対してイメージがあって、そういうのも相まって支援について、こう、継続というか、その場限りのではなくて、その土地に根ざしたっていうところをすごく考えられてたんだろうなっていうのを感じて。そこはまだ自分として、理解はできても共感はなかなかできない感覚だなっていうのがあるんですけど。そういうのが原動力になってるのかなていうところは将来自分が活動するときにもすごく参考にしたいな、といいますか。そういう、自分はどちらかというと大義名分めいたところで活動のモチベーション持ってしまっているところが、これまでもあったんですけど中村先生はそういうところではなくて、やはり現地の方々と生活をした中で、本当に友人に手を差し伸べるような、そういう感覚が根底にあったんじゃないのかなっていうふうに思ってまして、そこをどうやったら自分もその感覚を共感できるんだろうっていうのはいつも考えます。

村上　：例えば、あの当時、っていうのは 1984 年のことですれども、赴任するとアフガン難民が 300 万人いたんですよね。当然その中に医療関係者もいた。そこへ医療支援をするっていうときに、普通は自分が働きかけるわけです。要するに医療者がいるわけだから、それを束ねて、それをチームにして、そこが起点だったんですね。JAMS っていう団体作ったんですね。だからおっしゃるように、自分は何々をしてあげるというよりはああいう、すぐ溶け込んでチームを作って、それを軸に動かそうとか、非常に最初の段階から彼は（そういうところが）ありましたね。なぜそういうふうにしたかは、ちょっと分かんないけど。

飯嶋　：この辺って、読書会やっててもとっても整理が必要なとこで、今も話聞いてると彼（鉾立さん）なんかは、違和感みたいなところもありますよね。理解はできるんだけど、共感ができないところがむしろ引かれるって人もいれば、（この方なんかだと、）自分にない発想っていうのにちょっとびっくりしたっていう、そこに学びたいっていうので、いろんな側面を引かれてくるっていう人がとっても多いんですよね。

中原　：なんかその、現地で先生の実際を見ると、ですね、もちろん先生は哲学者的な部分もあって。まああの筆力、要するに書く力とか、そういうのもあって、いろんな捉え方ができるんですけれど、ものすごく楽しそうなわけですよね。楽しいというと語弊があるんですが、その、用水路を造るという本質的な意味と、困ってる人の命のためっていうのはそれは当たり前の話で、ところが現場ってのは一個一個の作業の積み重ね、なんですが、そこでの、本当に生き生きされてるわけですよ。

これは上手に伝えないと語弊を招くところなんで、なので、頭で考えて、これ大事だからっていう場面が当然あるんですが、一つ一つの現場感というのは、大義名分がどうとかじゃなくて、単純に本当にその作業を真剣にまた現実感をもってされてるのはもう一目瞭然で、先生ってのは元来こういう方なんだって、日本で取材してるときと全然違うんですよね。頭で考えられてるところもあるに決まってるんですけど、何か手を差し伸べるということと面白さというところがある。

當眞　：（進行アナウンス）今、お話中ですけど、ちょっとご相談です。

当初の計画は 11 時半ぐらいまでお話をして、それから 10 分休憩で換気をして、その後は宮﨑先生のお話を伺ってってことだったんですが、各グループを回ってみると、今ぐっとお話が深まってきた感じで、途中で切るのがもったいない気がするので、休憩なしで換気は窓を開けます。12 時頃まで続けていただいて、あと 30 分ぐらいたっぷり、グループを変えてもまたワーミングアップに時間かかると思いますので、12 時頃までこのまま適宜おトイレ休憩は取っていただいて、続けて、その後宮﨑先生のお話伺って、ということでよろしいでしょうか。皆さんうなずいておられる。じゃあ、どうぞ、Enjoy yourself! どうぞ楽しんで。

《近くで見てきた方たちには、中村哲先生はどう見えていたか？》

飯嶋　：先ほど、村上先生が言われたのはとっても、整理が必要だって言ったのは、他方で目の前の人に集中してるっていうふうにして見える側面もとってもある。

だけどそれだけ考えてたら今のようなことってできないですよね。つまりみんな、自分が前にいってやるんじゃなくて、現地の医者をオーガナイズしてっていうのは、目の前のここだけやってるんじゃできないことで全体のことを考えて、後の人のことだって考えてとかってやってないとできないことじゃないですか。

そういうのっていうのは、学生なんかのお話聞いてると、ここに共感する、ここに共感するっていうそこが、パって見えちゃうってだけで共感する事が多いんですけど、一緒にいると、その感覚ってどう見えてたんだろうなって、同時代の人として、僕らも含めてなんですけど同時代の並走者じゃもうない

んですよね。

だからさっき言ったように、現地の当時の文脈で読まなくちゃいけないってことを教えなくちゃいけなかったんですけど、一緒にやってた人たちにとってどういうふうに見えてたんだろうなって（思うんですけど）。

村上　：ふふふ。これ、質問が難しかったんですが。どうですか。

中原　：うーん。理屈を付けることはいろいろ多分できるし、それぞれ、ね、共感していいと思うんですけど、僕は先生の真髄っていうのは、本当シンプルな、思索に必ずアクションが伴ってるってことだろうなと思って。何かこんなことしなきゃなと、こうしたいなというのが常に≪現場感≫と自分の≪アクション≫で、そのアクションを重ねた体験の末に、思索があって、例えば私たちが読む本がある、と。

頭で考えて「この本を書きたい」と、「こういう人生を生きたい」と思ってされたんじゃなくて、とにかくもう、現場でずっとやってきた真髄としてのエッセンスが発信なので、この発信自体を、いろんな光の当て方は当然、今からされていくし、されるべきなんですけど。私が考える本質の先生としてはもっと、今までいつも取材をしても、禅問答になったりするんですよね。

結構、「なんでされてるんですか」っていうのは、やっぱり私もそこはぎりぎりまで書きたいと思うので、けどやっぱりそこは理屈でのＱとＡでは絶対にこう、分からないんですよね。先生はもうその、なんていうかなぁ、はぐらかされるような部分もあるというか、本当に素直にお答えになっても、それは頭で大義名分とか、考える世界では多分ないんだろうなっていう形で。「昔の日本人だからじゃないですか」っておっしゃるんですけど、それは本当にそう思われていて。なんかちょっと分からないかもしれないですけど、どうですか。

村上　：たぶんね、邊見さんのお話をちょっと聞いててそう思ったんだけど、彼ね相当な早熟ですよ。だから、あなたぐらいの年の頃にはもう既に人生のプランは相当考えていて、というか、彼中学校のときに、西南中学行ってね、宣教師、藤井先生に出会って、で、神の話に入っていって、てね。むちゃくちゃ早熟なんですよ。

同世代でも、中学生のときにそんなこと、考えたことなかったよ。だからベースにある、インテリジェンスというのはめちゃくちゃ彼の中にはあって、そのベースは多分彼の生育史の中には、片方で戦争があり、おじさん（火野葦平）が当時の方で、その後自殺もされてるわけだし、さまざまなそういう体験がベースにあって、出てきたものの全てが、彼は行動なんですよね。そして現場主義ですよね。だから当然、医療したり、（難民の中に）医者がいる、これを使おう、とかね。その辺の発想、ぽんぽんぽんぽん自由に出てくる。あの人の後の人生を見てるとぽんぽんアイデアが出てくるんですよ。

なかなか付いていけない。出てくる。この出てくる源泉の元ってのはやっぱ、あなた、邊見さんたちの年頃にね、どうも熟成されてるようにしか僕には見えない。だから、不思議ですよ。

木原　：その、ペシャワール行かれる前は、中村先生の将来のビジョンだったりっていうのはどういうところ目指されてたんです？

村上　：彼は精神科にいった。僕も精神科だった。彼はやっぱり自分の興味関心、「自分のこと」を考えて精神科選んだんですね。僕らの時、僕なんかは全く逆で、精神科医療っていうものは非常にそのとき陰惨でしたから、「これを変えたい」みたいなそういうモチベーションがそこに。全然違うんですよ、彼はもっと内面的な…、一緒になったけれどもそこの内面的なことはすぐ卒業しちゃって、彼は次のステップ、ですよね。

　ですから、精神科に対してもそうなったし、次に行ったところもあんまりいろいろ考えることなく、山に行ったときに、これも本当だと思うんですよね。山に行って、登山隊付きの（医者として）山に行くと、どうしても、患者さんに出会うけれども、ごまかしごまかし行かないといけない。この、ごまかしたっていうところが彼のすごい心の、何ていうかな・・・。

飯嶋　：「負債感」ですよね。

村上　：うん、（心の「負債感」）になって。次の年、僕一緒に山行ってるんですよ、同じ所の。そのときやっぱり、夜暇なもんだから、ソ連が攻める直前の時でね、行こうと思ったらなかなか入れなくて、山の中にずっと閉じこもって話をするんだけど、その人生観とかが、あるときやっぱりぶつかるんですけどね。だけどそういう中で彼は、「よし！こんなとこでやってみよう」と思ったんですよね。

　山に行ってなかったらまた、違った人生だった。あの人非常に、一面学者ですから、細かく調べていってね、こうして、ああしてっていうのが好きな人だから。もうちょっと違った医者になってたかもしれない。だけど、出会いでしょうね、やっぱり。

　素地にあるのはやっぱり人間に対する関心とか、自分に対する関心とか、僕は大きかったと思うし。早熟でした。それは全然見せないでしょ。

飯嶋　：そうですね。

村上　：後の本読むと分かるんですよ。こんなふうに深く考えてんだと。だけど、普段やってるときはそんな、どちらかというと口数の少ない、ただ聞いてるほうですね。時々、言うときにすごい、多分宮﨑さんがいうところでは過激だったみたいですけれど。そういう意味では確かに神格化しちゃいかんとか、ヒーローにしてはいかんと言うけど、あれはちょっと人間のただもんならぬ、だろうかな。それから行動面もあれはちょっと・・・。

鉾立　：一朝一夕でまねできるものではないって感じます。

村上　：だよなあ。そういう畏敬の念みたいな、畏敬の念といったらおかしいけれども、尊敬っていうかリスペクトする気持ち、非常に僕も強いんです。だから、今、一生懸命彼のあとをやってるので、それなしにあとをやったかっていうとそれは違ったし、彼のああいう生き方を傍目に見て同じこと今、福祉をやってますけど、ちょっと前まで僕も医者の世界で自分のいろいろな開拓せないかんってこと山ほどありましたけど、アイデアは彼のやり方を見てたから僕の後の人生の仕事も、人生の展開もあると思

うぐらい影響受けてるんだけど、直じゃないんですよ。おっしゃるように・・・。
　やっぱり彼のやってることから受けるインスピレーションっていうのは、彼の後を継いでこの事業をやってるというだけじゃなくて、多分全く別のところに生きてるんですよ。それぐらいなんか影響を受ける。発信力の強い。だけど、普通見てるとね、どこでもおるような。

鉾立　：見た目もすごい小柄でいらっしゃるから。自分もお会いしてお話もさせていただきましたけど、すごく、親近感がどうしても湧いてしまっているので、そこもまた、ギャップというか。そこを先生が意識されて感じさせなかったのか分からないですけど。

村上　：意識してませんね。

鉾立　：そこも多分、周りの人が引き込まれる一つの要因なのかなっていうのは、実際に会った身としてはすごく感じましたね。

村上　：それを実際会わないでもそう感じ取れるっていう感性は、僕すごいすばらしいなと思うんだよ。

邊見　：いきなり現地に行って、なんでそんなにすぐなじめるのかが、私にはよく分からなくて。私は、学校でさえ、人間関係とか苦戦してるのに、そんないきなり外国に行って、言葉もよく通じない状況で、しかも日本人とかより向こうの人のほうが、プライドとかも高くて、あんまり、けっこう内部的な交わりが強いっていうところに、なんでそんなになじめて、しかも動かしてっていうのができたのか、私は本当に不思議に思っていて、私には絶対できないだろうなっていうのをすごく思いました。

村上　：だけど引き込まれるんだよね、できないのはできないとしても。

邊見　：引き込まれますね。

村上　：だけど引き込まれるんだよね、あれ。

邊見　：その才能があるんですよ、きっと。

村上　：ぜひ生きてる間に出会っていただきたかった。

中原　：引き込まれます。

《宗教と中村先生の素養》

木原　：結構宗教的な側面は先生は強かったですか？

村上　：宗教ですか。

木原　：本とか読んでる感じだと、自分も家が神社の家系で、学校はキリスト教の学校だったんですよ。どっちも話を聞いてると中村先生も仏教の考え方だったり、キリスト教の考え方が結構入ってて、普段からそっちの、宗教的な方向の強い人だったのかなっていうのは、どうでしたか。それこそ向こう行ったら、また違う宗教があると思いますけど、その辺とうまくやっていくあれは、どう接する感じでいってたのかなっていうのが。

村上　：きょう宮﨑先生が講演するみたいだけど、彼はもっと中村先生よりもその、宗教的な人みたいですよ。彼も、中村哲も相当な宗教に関しての造形は、今おっしゃったようにキリスト教もあれば、彼は大学に入った時は、仏教青年会っていうのに所属していたりしたしね。活動していたところはイスラム教でしょ。だから宗教っていうのは彼の一つの柱には確かにあると思います。対立的ではない。

飯嶋　：ですよね。

村上　：あの、各宗教がね。

飯嶋　：そこにこだわってたらあれはできないですもんね。

村上　：そうですね。
だけど宗教には相当素養があると思っていただいてもいい。

飯嶋　：論語もそうですしね。

村上　：そうそう、おばあちゃんにずっと論語読まされて。彼の教養は論語なんですよね。
ぱっと出てくる言葉はね。ちょっと、だから得体が知れんの。

鉾立　：俗にいう英才教育的なところになってるんですかね。たまたまだとは思うんですけど。

中原　：その、「問題にするから問題になるんですよ」とおっしゃってましたね、宗教が。
こちらから余計なこと言わなければ、ムスリムの人たちも文句言ってこないし、そこは普通に尊重し合えばいいだけの話ですよ、と。

飯嶋　：キリスト教の中でも内村鑑三だしね。一番、尊敬してんのがね。
日本のキリスト教の中では独立教会派って、ちょっと日本の独自のやつなんですよね。
教会に、無教会主義って後にいわれるんですけど。だから、素養としてはすごいんだけど、そこに全然こだわるってことはないですよね。

鉾立　：飯嶋先生は文化人類学されてると思うんですけど、それこそ今、邊見さんが言ってたみたいに、そういう、全然宗教も価値観も違うような現場に溶け込んで、かつそこを一緒に頑張っていくのって、実際どれぐらい大変なことなのかみたいなの伺いたいなって思うんですけど、外から見たらそれは、言葉も通じないし大変だろうとは思うんですけど、やっぱり研究とかされてる中で、どれぐらい向こうのアフガンの人たちもどれぐらい受け入れてくれる気持ちがあるのかとか、そこをうまく中村先生が溶け込めたのをこう、先生から見てはどういうふうに思われているのかなって。

飯嶋　：文化人類学からいうと、外の人がそこに入るのは意外とそんなに大変じゃないんですよ。向こうの人のほうが排外主義的じゃなかったりすることもよくあるんですよね。

　ただ、僕は、中村先生が僕ら文化人類学と全然違うのは、医者だったから。お医者さんだったから、向こうが一番弱ってるところに入れたんですよね。具体的な援助の方法を持って。なら、キリスト教の医者だったら全員があれができたらかっていうと、一番最初の頃の本に書いてありますけど同じキリスト教のお医者さんでもそこで、ちょっと状況やばくなったらすぐにそこから逃げちゃったとかっていうことあるんで、やっぱりそこは独自なところで、さっきから言われてますけど、意図して真似しようとしてできることじゃなくて、いろんな縁の中であの人の人生と行動っていうのは生まれてきたとしかいいようがないんだと思う。

　生まれてきたものを後から意識的にフォローして真似ようと思ってもできないんで、そこから刺激を受けて学ぶことができても一方的にできるだけ、っていう感じがします。

村上　：もう一つね、同じことかもしれないけど、彼は 0（ゼロ）から 1（イチ）を作れる人なんですよね。何もないところから 1 を作れる。で 100 ぐらいまで作ってる。100 を 101 にするのは僕はできる。102 にも 110 にもできるけど、0 から 1 にして、そこを 100 まで育てるっていうのは彼の今までやったようなこと、0 から 1 ってのは、彼のやっぱし、ちょっとなかなかまねができんなという世界だと思うんですよね。だから、ああいう人に出会えたっていうのは僕なんかすごく幸運だったと思うんですね。なかなか出会えませんよ。

飯嶋　：ありますよね。同時代に生まれた本当に縁としか言いようがない、幸運としか。

村上　：ただ、一つ言えることは、そういう人が隣にいたときに、その人に影響を受けてその人を選ぶかどうかは僕らの問題。

飯嶋　：ありますよね、それもね。

村上　：自分の選択だからね。

飯嶋　：だから、強烈な人がいたときにそこから距離を取る人もいっぱいいますもんね。

村上　：彼のはね、強烈っちゃ強烈だったのかもしらんけど、強烈と思わんかったんだよね。全然強烈に

思わんかった。

飯嶋　：じゃあ村上先生の中で出会ったときの外見と話を聞いたときのギャップとで理解したりとか、中村先生との関係ってのも、理解がぐーっと深まってたっていう時期があったわけですか。最初からそういうのが分かってたわけじゃなくてってことですよね。

村上　：まあ、普通にやってましたよね。酒も一緒に飲んで。事業始めてから、彼は飲んでませんけどね。昔はまあ、一緒に酒を飲むこともあったし。

飯嶋　：医学部の頃とかですか。

村上　：いや、医者の頃ですね。医者になった初めの頃。僕は今いった肥前精神医療センターというところから大牟田労災病院というところに、（中村先生は）そこで CO の炭塵爆発の患者さんの治療と、それから新しい神経医療内科これをしてあったんですよ。僕はそれを研修に行って、10 時ぐらいまでいろいろ教えてもらって帰りバスで一緒に帰るんですよ、新栄町ぐらいまで行くと、ちょっと降りて飲んでいきましょう、っていうのはありました。そんなに飲むタイプじゃなかったですけどね。

飯嶋　：そのときってどういうお話をされるんです？

村上　：そんなに難しい話してない。

飯嶋　：難しい話はそういうとき、するんですか？しない？

村上　：します。何の話したかな。そんな心に残るっていうよりは、僕のほうがとんがってたからね、昔のこと言うと。聞いてたんじゃないですか。

飯嶋　：そういう感じか。

邊見　：先生はどうやって現地の言葉を学んだんですか。

村上　：言葉？英語はものすごい得意だったみたい。

邊見　：英語はよく聞きますけど、英語なんですか、通じるんですか。

村上　：英語はね。英語は必ずちゃんと向こうでは公用語に近いところもあったんで、英語なんだけど。あとはもう本当に入っていって、暇だから、ちょっと遊びに行って、ずっと 1 人で行動して、そこで。人懐っこいというか、抵抗がないというか。あの人懐っこさがひとつかな。あの、意外とシャイな感じ

もあるけれども人懐っこい感じですね。

邊見　：ユーモアがあるところもあるって結構聞くんですけど、関わってないから全然分からないんですけど、聞きたいなって思いますね、ユーモアとか。そういうのを取り入れたらっていうかそういう人柄的なところから興味を持ってくれる人っているのかなと思います。

《中村先生を取材する。厳しさ、ユーモア、親しみやすさ、皮肉》

鉾立　：中原さん、実際に取材してく中でどういう感じで関係性を築かれたのかなとか。
違ったら申し訳ないですけど、中村先生ってあんまり日本の報道の方のインタビューとかはあんまり答えたくないみたいな雰囲気があったっていうイメージがあるんですけど、でもやっぱり報道側のかたがたがそこに食らい付いてといいますか、引き出そうっていうふうにされてたと思うんですけど、今のお人柄の話で人間関係みたいなのを構築する中で気付きとかはあったんですか。

中原　：僕は取材するのが仕事なので、中村先生は決してインタビューを嫌ってるっということではなくて、むしろ機会があればきちんと応じてお話をきちんと、どんなメディアにもされていて。ただ、僕は非常に厳しい人だと思っていたし、今も思ってるんですよね。厳しいっていうのは、理不尽な意味じゃもちろんなくて、なので、すごい緊張してましたね、いつも、ずっと。何度取材してもやっぱり。
現地に行ったときに「石出水制」といって、川が、ここが川だったら、水の流れを通すときに、ここ、張り出し構造物みたいのがあるんですけど、「あれが水制ですよね？」って、多分そういう質問したんですよね、初日に。雑談じゃないですけど。そしたらですね、「勉強してこなかったんですか？」って言われたんですよ。いや、（勉強）してきたわ！と。

一同：（笑い声）

中原　：もちろんそれは先生がたに比べれば勉強なんてものは・・・。
　アフガニスタンに行くので、1カ月半くらいその勉強だけしてきてる。悔しくて。あと、まずいじゃないですか。なので、ノートに現場の状況はこうで、会報とか報告書とかもずっと見てこうだって、中村先生に翌日現場で見せて、「先生ここなんですけど」ったら「ようやく新聞記者らしくなってきましたね」って言われて。
　冷たいというか、僕はずっと思ってたのは、報道の役割というのを信じてくださっておられる方なので、こうあるべきだ、こうあってほしいというか、わざわざ取材を現地で受けてくださったのは、証人がほしい、目撃者がほしいんだっていう、それは報道に意味があると思ってくださってる。こっちもなんか「信頼をされたい！」と思うんです。これ何の質問でしたか、忘れちゃいちゃいましたけど。

鉾立　：でもそういうので、人間関係の、村上先生の話からすると、結構、中村先生って打ち解けやすい人なのかなって思うけど。

中原　：もちろんそうですよ。ふつうに取材とかで一緒に 2 週間いたときとかも、冗談もおっしゃるし、なんですけど、ああ、今の仕事の話ですね。人としては、僕は顔がはっきりしてる、要するに、顔濃いんで、「あなたは今まで来た日本人の中で一番アフガン人に似てます。」

一同：(笑い声)

中原　：それだけですね、ほめられたのは。で、みなハザラという、ハザラ人っていう人たちがいて、日本人っぽい顔してるんですよ、どっちかというと。なのでいつも現地に行くと「中原はハザラ人だ」と、もう毎朝同じ冗談を言って、わーっと笑うという。なので

鉾立　：ひょうきんな方なんですね。

飯嶋　：でもそれ海外で関わるときってあるんですよね。こっち側がどういう意図か、じゃなくて、向こうがこっちをどうやって認識したかって話で、ただ似てるから単純に向こう側が親近感を持つとか、そういうのってありますし。あと、さっきの、もともとのこの話が始まったユーモアのセンスよね。僕、だから、本読んでて、なるほどこういうのはこういう読み方があるんだと思ったのが、羊土社かな、どっかマイナーな出版社から出た本（＊注 4）が、講演とその質疑録なんですよね。

鉾立　：みました。医学生むけのやつですよね。

飯嶋　：そう、そっちだと、本で中村先生が書いてるときってのは、一般読者に向けて、まずはペシャワール会の人に向かって、で、一般の読者に向かって書いてるけど、そっちのほうではやっぱり別の側面が出てくるんですよ。変な質問をされたときにどういうふうにして、傷付けないようにしてかわしてるかとかね。そういうのが見えるようなときがあって、そっちの方を見たらそっちのユーモアみたいのが見えるかもしんないですね。

邊見　：私も最近高校で講演をされたときの講演録（＊注 5）を読んだんですけど、やっぱり感じられないような側面もあると思いました。高校生に対してどんなふうに講演されてるのかなっていうので。インタビューとかもあって、活動だけじゃなくて、ああ、持ってくればよかった。すごく引かれるところがあったんですけど。すごく勉強になりました。

＊注 4：『医者よ、信念はいらないまず命を救え！：アフガニスタンで「井戸を掘る」医者中村哲』(2003.10,羊土社)
2003 年 4 月 26 日東京医ゼミに行く会（全国医学生ゼミナール）春医ゼミでの講演録・質疑応答等を収録

＊注 5：県立福岡高等学校生徒会発行の校誌『福高』(年 1 回刊）に掲載された過去の中村哲医師の講演録を集め、『福高 ： 別冊』ペシャワール班編（2022.8,福岡高校生徒会）が発行された。
http://hdl.handle.net/2324/4845522（中村哲著述アーカイブ）

飯嶋　：その当時のを見てたわけね。自分が高校生だからそういう目でそれを見てたわけね、なるほどね。

中原　：ちょっと答えだけ言うと、信頼関係を築こうというふうにおこがましくは、中村先生には僕は思わなかったですね。とにかく一生懸命して、君は話すに足る、多少、話すに足るねと思ってもらいたいぐらいで、ここにも先生、教授の先生がおられるんだけど、弁護士も医者も、「先生」っていうじゃないですか、政治家も。でもそれ「先生」っていってるだけじゃないですか。先生方いるのに失礼なんですけど、中村先生って「先生」って言わないと礼を失するような人なんで、この人、信頼関係築こうとか、そういう大それたことをちょっと思えなかったっていうことを、言うのを忘れてました。

鉾立　：ありがとうございます。でもなるほどなって思いました。

村上　：本当、不思議なことなんだけど、僕は下ですよね。年齢的に三つ下で、学年は本当は二つ下だけど一つ下で。上の人もそうで、下の僕らもみんな「哲っちゃん」と呼ぶ。普通に仕事の時も、あんまり中村先生とか言わない。みんな哲っちゃんって言う。僕もずっと哲っちゃんって呼んでて。最近は、なんかもう、こんなとこで哲っちゃんと呼んでるわけにいかないんで、いわないんだけど。それが僕らだけじゃなくてみんなそうなんだよ。この人間に対する親近感みたいな本質的な感覚があるんだよね。

當眞　：なんか、かわいいですよね。

村上　：おちゃめなとこあるからね。

中原　：そういうふうに呼ばれる人間の愛嬌みたいなのお持ちですけど。

電波ニュースの谷津さんとかも、現地で一緒で。とにかく中村さんが大好きで大好きでしょうがないみたいな、ですよね。それよく分かるんですよね。

先生は車の中とかでいろんなこと教えてくれるんですよ。「ここケシ畑だったんですけど、なくなったんですよ」とか。こっちはもう一言も聞き漏らしたくないんですよね。でも、それは、私に向かって教えて下さってるわけです。僕はルポルタージュを書こうと思うので、すごい大事なことなんですけど、がたがたする車、道路の道が悪い所で、先生は前を向いていつもと同じ声でしゃべられるんで、もう全っ然聞こえないんですよ。そこがもう、「らしい！」というと失礼なんですけど、こうやって（体を話す相手に向けて）話したらいいんですけど、そうじゃなくてもう、全っ然聞こえないんですよ。なんか、だいたいそういうことが多いかなって感じ。

一同　：（笑い声）

邊見　：全然関係ないんですけど、ケシの話が、この前講演録に出てて、ケシの栽培が自由にとは、みたいなことが書いてあって、タリバンが崩壊してから、アメリカが来てから、いろんなことが自由になっ

てケシの栽培も自由になったって書いてあって、何のことかなって思って分かんなかったんですけど、ケシの栽培が自由になるってどういうことなんですか。

飯嶋　：ドラッグのことやね。

村上　：皮肉ってんですよ、それはね。ケシを栽培する自由。貧しい人がこじきをする自由。それから、女の人が食えないから売春をする自由。

邊見　：ああ、同じこと書いてました。

村上　：これを、こういう自由がある。昔は自由がなかったっていうけど、今は自由だっていうと、こういう自由があるっていう、彼の皮肉。実際事実でもあるし、皮肉でもある。

邊見　：ただ、ケシは麻薬だから、それをすることによって現地の人は悪い方にいくと。

村上　：タリバンのときは、宗教上彼らの理由があって禁止してたんです。タリバンが支配した 1990 年代の終わりはアフガニスタン、ケシがほぼなくなった。タリバンいなくなった直後に僕が行ったら、すぐケシ畑に変わってた。だって、あれ小麦を作るのに比べて 50 倍ぐらい価格が高いから。

中原　：乾燥にも強いんで、それを売って、小麦を買うわけですよ。食べれないのに。

飯嶋　：だから、文脈としてはみんな自由だ自由だって言って、自由がほしいって、それがいいもんだって言ってるけど、こんな自由だってあるんだぜって、それ考えてちゃんと自由って言ってる？っていう。だから「三無主義」って僕すごく大事なメッセージだと思ってて、無節操、無駄、そして無思想でしたっけ。つまり思想なんていったら、アメリカとソビエトで全く対極する思想言ってて、でもやってることアフガンから見たら一緒だよっていうことですよね。だから、言葉を信じない。行動やるやつ信じるって話でしょ。さっきのは、そういう切り返しの皮肉みたいなとこですよね。

中原　：自由と民主主義がもたらしたもの、こんな自由もあるんだけどっていうことですね。

當眞　：（進行アナウンス）とても声を掛けるのを躊躇したくなるような座談の深まりが起きてるのですが、時は流れ、今ちょうど 12 時になりました。ここ、実は 1 時間、あと 1 時ぐらいまでの予定なんですね。この後、宮﨑先生からぜひお話を伺って、その後もう一度車座になって、全体で語り合いをと思っているのですが、何かすごくここで切るのが暴力的な気がして、どうしましょう。あと 10 分ほしいとか言うんであれば、10 分ぐらいどうにか伸ばせるかなと思いますけど、もう、動いていいですか。キリがないといえばキリがないかもしれない。よろしいですか。

会場　：あと 5 分ぐらい。

當眞　：（進行アナウンス）あと 5 分。はい、あと 5 分という声がありましたので、突然途中で切ると良くないと思いますから、あと 5 分で切り上げて、5 分たちましたら、ここの車座の所に移動していただいて、宮﨑先生にはご発表の準備いただいて、おトイレに行きたい人はどうぞ。ということでちょっと時間奪っちゃったから、あと今から 5 分、だから大体 7 分ぐらいまでですね。どうぞ、そのようにしたいと思います。

飯嶋　：じゃあ、聞きたいことをお聞きください。せっかくの機会なんで。
特に僕らは本当に本だけでしか知らないっていう、あるいは講演でしか知らないっていうので、同じ時代で走ってた人と全然違うと思うから。

《中村哲先生のことを、現地の活動を、これからどのように伝えていくのか》

邊見　：樋口くん。

飯嶋　：（今日来られなかった）樋口くんの質問、報道のみなさんにね。

邊見　：報道のかたに、先生がやって来られたときは、もちろん活動について発信していたけど、やっぱり亡くなって活動とかへの（取材も）していくと思いますけど、その中で中村さんのことはどういうふうに発信していこうというふうにお考えですか。

中原　：一番根本的な部分なので、それは書きながらずっと考えてるところですよね。
　だから、最初に聞いたように皆さんにも教えてほしい部分もあって、会長がおっしゃったように、みなさんどういうところで共感したのかっていうところも、一応勉強してやっていきたい。ずっと多分模索だと思うんです。何でもそうなので、継承というのは。
　ただ、決定的にあるのは、今ペシャワール会と PMS は現地で事業をしてるんですよね。なので、これを伝えるという、これを知ってもらうということが一番大事なので、一番というか、中村先生自身も哲さん、哲さんといったら、「それはいいので現地のことを応援してください」と、例えばね。現地のことを、私には「現地のことを書いてください」って絶対おっしゃるので。そこに皆さんの共感したとか、すごい人だなって力を実際の力として、現地の事業の継続にどうつなげるかっていうのは、書くときは絶対忘れないようにして。中村先生の顕彰する記事でも、どっかにそれが、現地の直接のパワーにつながらないと、もったいない。ちょっと主客が転倒するんではないか。今は現地の活動がずっと続いているわけなので。まあ 50 年後とかどうなってるか分からないわけですけど、少なくとも今動いてるからですよね。そこがすごく大事、なんかあんまり答えになってないんですけどね。どうやって伝えていくのかずっと考えてますけど。

飯嶋　：でもそれって大事なところだと思いますよ。水俣でも原田正純さんとか、石牟礼道子とか、みんなやっぱりそっちの人に注目しちゃうんですよ。だけどみんな（原田さんや石牟礼さんたち）が言ってんのは、中村先生も一緒だけど、いやいや水俣病の患者のこと見てくれよってことなんですよね。僕はいいからさっていうような感じだったんですね。そこもすごく大事なことですよね。

中原　：両方だと思うんですよね。中村先生への共感と実践を伝えること、それが直接のパワーになるのが一番いいことだな。

邊見　：高校とかで伝えていくってなったらやっぱり、どっちも伝えてくっていうのはすごく大変だなって思って。やっぱり根本的なところをみんなまだ知れてない状況で、いきなり現地の活動（の話に）いっても、「何これ？」ってなるし、先生のことをあんまりフォーカスし過ぎても、「だから何？」っていうふうになっちゃうから、そこがすごい難しいかなって思ってます。

鉾立　：自分たちも、九大から特に若い人に向けて発信をしていく立場として、いろいろ考えてきたんですけど。やっぱり今の悩みを聞いてると、それでも興味を持ってくれる人に対して、まずは知ってもらうことで代わりに発信してくれる人の数が増えていけば、だんだんだんだんその輪自体が広がっていくのかなって思っていたので。

　最初から全員にとか、興味ない人にもっていうよりは、段階を追ってとか、やっぱり周りがみんな中村先生のことをよく知っていくにつれて、自分も知らなきゃいけないのかなって思うんじゃないかなと思って、正直、九大の医学部生もなかなかやっぱり知らないので、ちょっとずつでも知る機会を増やしたいなと思って活動してますって感じです。

當眞　：（進行アナウンス）どのグループも座談が本当に深まっておられて、このまま続けたいところですが、お約束の約 5 分ほどになりましたので、じわじわとこちらに移動していただいて、どうぞ、おトイレ休憩もしていただいて、宮﨑先生のお話にみんなで一緒に耳を傾けて。

飯嶋　：やっぱりキリがないよね。

當眞　：（進行アナウンス）この後はまた全体で語り合うという時間を用意していますので、語り残した部分はそこでまたシェアしていただけるとありがたいなっていうふうに思います。

飯嶋　：お互い知り合いになれて良かった。取りあえずありがとうございます。

一同　：ありがとうございました。

（了）

座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	村上優(むらかみ　まさる)　ペシャワール会会長、PMS 総院長,医師
専門・仕事	精神科医療、特に依存症医療、司法精神医学、DPAT(災害精神医療)、 国立病院(国立病院機構)の公的精神科病院運営
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
1974 年に国立肥前療養所で出会い、大牟田労災病院、ヒンズークッシュのトレッキング、ペシャワール会のメンバーとしてかかわる	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
ペシャワール会の活動に関わらず、生き方のすべてに影響	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
時と場合で変わりますが、現在はこれしかありません 「水は善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなろうと、他所に逃れようもない人々が、人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います。」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
これほど長く彼の地にとどまり、世界のすべての矛盾が現れる現場で、常に前線で、灯りのないところを灯し、道を作っていく、中村哲の生き方	
その他	中村哲は単純で明確なメッセージ性の側面と、深い思索的な面とがあります。多角的な見方で理解が進む、そのためのデータベースの蓄積と研究者がでてくること、そして継承し実践してくれる人の育成を期待しています。

	中原興平(なかはらこうへい)　西日本新聞社
専門・仕事	2002 年西日本新聞社に記者として入社。事件や事故、災害の担当が比較的長く、特に近年では熊本地震や九州豪雨などの災害現場のキャップなども務めました。新聞記者の仕事は突き詰めると「人権」を守ることだと考え、裁判のやり直し(再審)が議論されている過去の殺人事件や部落問題についての長期連載も手がけてきました。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
本格的に取材を始めたのは、2014 年。戦後 70 年を目前に迫る中、安全保障法制が議論されていた時期です。日本の国際貢献の在り方や平和への道しるべとして、中村哲医師の活動を道しるべとしたいと考えました。現地で密着取材をしたほか、国内でも繰り返しお話を聞いて、記事にしてきました	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
非常に多いので、絞りきれませんが、「どうせやらないかんことは決まっとる」「目の前のことをただやりなさい」でしょうか。ペシャワール会のスタッフにかけられた言葉です。	

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
「キリスト者として生きるとは、『当たり前の人』として、今をまっとうに生きようとすることである」と、中村さんは述べています。私は「キリスト者」だけでなく、すべての人に通じる言葉で、誠を尽くすことの大切さを説いているのだと思っています。中村さんの生涯の実践を通じ、このメッセージの意味を自分のものとすることが大切だと考えています。	
（報道関係の方へ）国際情勢が変動する中、中村哲先生の活動や価値観には変化はあったのでしょうか？＊	
根幹の部分には、一切の変化はないと思います。アフガン戦争 20 年の経緯と結末から見ても、結果として浮き彫りになったのは、その間も一貫して続けられた中村さんとその活動の正しさだったと思います。	
その他	顕彰の活動を丁寧に続けられている九州大学と学生の方々の取り組みと姿勢に敬意を表したいと思います。アフガンからの米軍の撤収など、物事が大きく動くときに注目が集まるのは当然です。新聞ももちろん、そうした際に大きく注目します。ですが、大切なのは普段の取り組みだと考えています。中村さんのことを直接知らない人たちが増えていくのは当然。今後、どのように中村さんとその事業のことを伝えていくかが問われていると自戒を込めて考えています。

	樋口　響（ひぐち　たくと）　　福岡高校 1 年　ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
昨年の 6 月（文化祭）で。 母校が同じで、後輩であり、先生の思いを伝える活動をしている	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
医師になりたいという夢の幅が少し広がりました	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
百の診療所より一本の用水路	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
活動のみを伝えるのではなく、その気持ちを伝えるようにしている	
ほかの参加者の方に質問！	
（報道の方、大学生の皆さんへ）これから先生の思いの発信方法はどのようなものがありますか （教える立場の先生方へ）どうやって伝えようと工夫していますか。	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？＊	
どういう経緯で、活動を始めたのかを知りたいです。	

	邊見紗来（へんみさら）　福岡高校 2 年　ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
中村哲の母校に通っていて、活動を伝えるために活動している。 先生が銃撃でなくなったとき。	

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？
先生の信念に感銘を受け、母校である福岡高校で先生の活動、信念を伝えていきたいと思った。
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？
水のようにごまかさない、水のように正直なこと
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい
先生は本当にすごいことをしているけれど、決して大それたことをしようとしてやったわけではなく、ひたすらに自分の信念を貫いた結果医療活動以外のことも成し遂げたということ。 先生はそれを当たり前だと思っていたこと。
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
活動を伝えるだけでなく、その背景にあった先生の信念や活動を伝える工夫をしている。 特に、言葉を大切にしている。今後高校でどんなふうに伝えていくか悩んでいる。
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？＊
先生の昔、学生時代について　先生の宗教観

	木原 秀将（きはら しゅうま） 九州大学医学部１年,哲縁会
中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？	
（先生が亡くなった時に知る。）中村哲記念講座 2021 年度受講生	

	鉾立春響（ほこたてはるき）九州大学医学部６年　中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会
専門・仕事	学生生活では国際ボランティアの団体で全国の代表を務めました。 将来は途上国の乳幼児死亡率を下げるべく、医療だけでなく教育や経済の面からも支援できる国際協力医師を目指しています。春から医師として神奈川県で働きます。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
九州大学に入学して、ひょんなことから中村哲先生が九州大学医学部出身だと知った。 大学 3 年の時に初めて中村先生の講演を生で聞き、その翌年に実際に先生の前でプレゼンをさせていただき叱咤激励をいただきました。先生が亡くなられてからは九州大学における「中村哲先生の想いを繋ぐ会」の運営に携わりました。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
偉大な学部の先輩であり、自分自身の将来の目標を達成するための手段の一つを与えてくださった。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
講演会の中で、科学技術の発展に対して「それよりももっと大切なことがある」と強い意志表示された時の姿勢や言葉	